様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：４４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８５３

研究課題名（和文）日本近世仏教教団の流動性に関する研究-浄土宗教団を中心にして-

研究課題名（英文）Study on mobility of Japanese Buddhist religious society in Japanese early modern period - Focusing on the Jodo sect -

研究代表者
伊藤　真昭（Ito, Shinsho）

華頂短期大学・歴史学科・教授

研究者番号：３０６３２８９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代、浄土宗の僧侶になるためには、関東に18ある養成機関（檀林）のどれかで修学しなければならなかった。そのうちのひとつ、増上寺には160年分の入学者名簿が残されていて、そこには卒業後の進路も記されていた。
その内容を検討した結果、全国から入学した約9000名のうち、34.3%が死亡や病気、退学などで卒業できず、36.9%が住職として地元に戻り、23.9%が地元以外の住職となったことがわかった。特に4分の1が他国の住職となっていたことは、浄土宗僧侶が流動性をもっていたことと、統一された教育を受けた僧侶達が日本中に統一された教義を浸透させていったことを示している。

研究成果の概要（英文）：In the Edo period, in order to be a priest of Jodo sect, people had to study at one of the 18 training institutes in Kanto region. Zojoji temple has rosters of enrolled students from 1669 to 1887 ,and their career after graduation was written there.
The results of a study shows that 34.3% of about 9000 enrolled students from all over Japan could not graduate due to death, illness, withdrawal etc, 36.9% returned to the country where he was from as a priest ,and 23.9% became a priest in other countries in Japan. Especially, the last result means that Jodo sect priests had mobility all over Japan and that the priests who received the unified education dispersed the unified doctrine all over Japan.

研究分野：日本史

キーワード：浄土宗　檀林　僧侶養成　入寺帳　流動性　増上寺　仏教教団

１．研究開始当初の背景

近世の僧侶は江戸幕府からの統制を受け、宗派に属さない寺院は原則許されなくなり、どこかの宗派に属すこととなり、全国教団となった。また僧侶になるためには、宗派の定めた檀林での統一的な修学が義務づけられ、質の保証が図られた。本研究はそのような時代にあって、一人前の僧侶になる階梯や僧侶になった後の動向をさぐろうと開始したものである。

２．研究の目的

本研究は、日本近世において全国規模に組織が拡大した仏教教団の構成員である僧侶について、その活動範囲も全国規模に拡大したのかという課題を、日本全国に 6500 ヶ寺の末寺を抱える教団である浄土宗に残された『入寺帳』を素材に検証するものである。浄土宗では正式の僧侶になるために増上寺を筆頭とする関東の檀林で修学することが義務づけられていた。そこで作成された、学籍簿である『入寺帳』を分析することで、僧侶の出身地、出家地、修行地、住職地といった僧侶としてのキャリアを明らかにし、ひいては全国教団を底辺で支える僧侶が全国を遍歴する実態を解明したい。今日のように世襲で固定化されていない、流動性の高い近世の仏教教団の基礎的なデータを蓄積することが本研究の目的である。

３．研究の方法

『増上寺入寺帳』を写真撮影し、全データをエクセルに入力し、そのデータを数的に処理し、近世浄土宗僧侶の行動実態を数字で表示しようとした。

時期の限定はあるが、入寺帳には、入寺時の出身寺院の情報だけではなく、最終的にどこの住職になったか、その間どのような動きがあったのかという情報も記載されているので、出身寺院と住職赴任地が判明する。その情報を分析することで、地方から関東に修学に来た僧侶が、その後地元に戻ったのか、関東に留まったのか、それ以外の地域に赴任したのかといった基礎的データを明らかにしようとした。

４．研究成果

近世、正式な浄土宗の僧侶になるためには、関東に 18 ある檀林のどこかで修学を積まなければならなかった。そのため全国からそうした目的を持つ者は関東を目指すことになる。十八ある檀林の中で最も人気が高かったのが江戸芝にある増上寺である。そのため幕府は一極集中を防ぐため、増上寺の定員を 70 名と定めるほどであった。

増上寺にはそうして入寺した僧侶の入学者名簿が残されている。今回調査を許可されたのは破損状況甚大のため閲覧することができなかった２冊を除く 31 冊で、そこには延べ 2 万 3000 人余りの名前が記されていた。

増上寺に入る方法としては、２通りあった。ひとつは毎年入寺できる 70 人の定員は鬮で決められ、1 月 11 日に入寺した。もうひとつは、表向き増上寺にいる僧侶の弟子となって入寺する方法である。これを「似我弟子」といい、実際には定員を逼かに超える僧侶が毎年入寺した。その入寺原簿が「入寺帳」である。

現存のものは、寛文９年（1669）から始まり、途中欠落したものもあるが、明治 20 年（1887）まで、158 年間分の入寺帳が残されており、本研究ではそれらを全文解読し、エクセルデータとして入力して、今後の研究に資することを目的とする。その際基礎的データとともにそこに記されている人々がどのような人生を歩んだのかを跡づけていきたい。

1　記載項目の内容

入寺帳の内容を項目別に入力した。以下のその項目を説明していく。入寺帳は修学僧を管理する 13 人の月行事が記入した。当初記載された本文の他に、その僧侶の履歴をその時点の月行事がその情報を追記していった。追記が本紙に記入されていればは問題ないが、付崖に書き込んで貼付した場合、その多くは糊離れしており、挟み込んである。糊離れした付籤がそのページにあったものかどうかは内容から判断するしかなかった。なかには割印があり張り付けたあった場所が特定できるものもある。内容から元の位置が判明する場合もその人物の所に統合した。判明しない場合は備考にその内容を記載した。

付崖も含めて基本的に全ての文字情報をエクセルに入力した。その際以下の項目を立てた。

①入寺年月日。②月行事名。③入寺時修学段階。④入寺方法。⑤入寺年数。⑥七十僧・随身等。⑦出身国。⑧寺院所在地。⑨寺院名。⑩師弟関係。⑨初入寺年齢。⑩寮坊主名。⑩指南坊主名。図僧名。⑩初入寺名。⑩履歴。以上の 10 項目である。

①初入寺、他山入寺、帰山入寺も含めて、増上寺に入寺した日付である。

②月行事は。増上寺山内の事務処理を月ごとに交代で行、入寺帳の記載も彼らの手にかかった。

③修学段階は、初入寺時の名目部から、頌義部、選択部、小玄義部、大玄義部。文句部、社讃部、論部、無部までの９段階に分かれている。他山や帰山の際には修学段階と修学年数が記載されている。

④増上寺にどのような状況で入寺したかを帰山、他山、その他に区別している。

⑤他山･帰山で入寺した際、同じ修学段階だと初入寺からの年数によって席次が決まるため、年数が記載されている。なおどの席次に位置するかも記載されている場合もあるので「席次」の項目も立てた。

⑥入寺の際、定員内であれば、「七十僧」、随身であれば、「～和尚随身」と特記される。

⑦～⑩入寺僧の出身に関する情報が記載さ

れる。
⑨最低修学年齢は 15 才と定められていて、それまでは地元の師匠に就いて修行していた。入寺最高齢は安永３年（1774）11 月 15 日に入寺した恵光の 29 才である。最年少は寛保３年（1743）11 月９日に入寺した激紘の 14 才であるが、15 才以下であるため今後の課題である。
⑩～⑨入寺僧が生活を送る学寮主と学問の指導に当たる指南役の名前、そして入寺僧本人の名前である。

２内容の分析

一　全体を通しての分析

①記載されている人数

『入寺帳』全 31 冊に記載されている延べ人数は、２万 3682 人で、その内初めて増上寺に入寺した初入寺僧は１万 7483 人である。帰山の度に記帳されるので、随身として他山、帰山を繰り返せば、その都度同一人物が登場することになる。したがって正味の人数はこれよりも減ることになる。ちなみに帰山は 2233 人、他山は 3475 人である。他山僧は他の檀林から増上寺への編入であり、他山以前の詳細が不明であるため、ここでは除外する。初入寺は文字通り初めて増上寺に入寺することであるので、生涯に一度しかない。そのためここでは増上寺への初入寺僧がその後どのような道筋を辿ったのかを追跡したい。

②初入寺僧の行く末

１万 7483 人の初入寺僧が最終的にどこまで追跡できるかで、いくつかの類型に分けられ、それらを国別にまとめた。

檀林の住職になる「出世」は全体の僅か 0.4%の 62 人しかいない狭き門である。檀林住職は増上寺の月行事から就任するのが通例なので、増上寺に残れない僧は、全国に散在する寺院の住職を目指すことになる。出身寺院あるいは、出身国の寺院の住職になった「国元成就」は 3224 人、出身国以外の住職になった「成就」（ここではその内容がよくわかるように「他国成就」とする）が 2091 人で、内容がよくわからない「引込切」と合わせると全体の 33%が修学を完成させて出寺していった。その一方で病気や死亡、そして退寺処分などで 17%が途中で修学を断念せざるをえなかったことになる。

残る半数の内訳は、随身として他の檀林に移った場合が 14.1%、入寺後の消息が記載されていないものが 35.9%である。どちらも最終的な行く末が不明なので、ここでは補外する。

二　成就と退寺の 8748 人

成就した 5744 人と退寺した 3004 人の出身国を分析した。

①成就の 5744 人

ⅰ）国元成就

地元に帰った 3224 人のうち最も多いのは増上寺のお膝元である武蔵国で 849 人、その次は山城国の 299 人であった。全体平均修学年数は 16.3 年で、成就した時の年齢は 30.3 歳であった。

ⅱ）他国成就

出身国以外の他国で住職となった 2091 人のうち最も多いのは武蔵国で 1114 人と半数以上を占める。次に多いのは山城国の 102 人なので圧倒的である。武蔵国では国元成就の 849 人よりも多い。ほとんどの国では地元に帰る人数の方が多く、山城国の国元成就は他国成就の３倍である。この武蔵国の事例は特に注目すべきである。全体平均修学年数は 16.5 年で、成就した時の年齢は 31.3 歳であり、国元成就よりも長く修学していたことが伺える。

ⅲ）出世

檀林の住職となった 62 人の出身者で一番多いのも武蔵国であった。その次は山城国と信濃国の 5 人である。全体平均修学年数は 33.6 年で、成就した時の年齢は 48.7 歳であった。

参考までに檀林にも格付けがあるので、寺格別に没年齢の平均を見ると香衣檀林は 54.5 歳、一枚紫衣地は 62.2 歳、引込紫衣地は 62.8 歳、二枚紫衣地は 65 歳、三枚紫衣地は 74.3 歳となっている

ⅳ）引込切成就

この成就の内容はよくわかってはいない。特徴的なのは 367 人中 361 人が修学年数 11 年という点である。国別では山城国の 49 人が最多で、武蔵国の 30 人が続く。

②退寺の 3004 人

ⅰ）病身

国別では武蔵国の 299 人が最多で、111 人の山城国が続く。なかには病気が回復して復帰する場合もあるが、ほとんどは退寺したままである。その後の消息は不明であるが、出身寺院に戻ったと考えられる。平均修学年数は 13.3 年、退寺したときの年齢は 28.9 歳である。年平均では 18.5 人である。

ⅱ）死亡

国別では武蔵国の 331 人が最多で、135 人の山城国が続く。平均修学年数は 10.5 年、死亡したときの年齢は 26.2 歳である。年平均では 21.2 人であることを考えると、病身者よりも若く、そして多くの僧が亡くなっていることになる。

ⅲ）不見届

最も人数が少ない 359 人だが、そのうち武蔵国が 126 人で約 3 分 1 を占め、山城国が 30 人で続く。原因については全く書かれていないので詳細は不明である。

三　他国成就の詳細

武蔵国出身の初入寺僧は、成就者のうち半数以上が他国の住職になっているのはすでに述べた。それではどういった所の住職になっているのかもう少し詳しくみてみよう。

武蔵国出身者が全国各地に拡がっている一方で他国から武蔵国の住職になっているのも 378 人で最も多い。その次は山城国が 124 人で続く。

つまり武蔵国は、最も多く全国の住職を輩出する一方で、最も多く全国から住職が集まってくる場所だということになる。

おわりに

増上寺に残された『人寺帳』を分析することで、江戸時代の浄土宗僧侶の姿が浮かび上がってきた。半数は記録上入寺後の動向は不明であるが、残りの半数でみてみると、次のようなことになろう。

増上寺に入寺後、残念ながら死亡、病気、素行不良などで修学を満了できなかった者は34%にのぼり、住職となることが難しかったことがわかる。住職になるためには約 16年間の修学を無事に終える必要があり、そのうち地元に帰った者は人寺者全体の37%、地元以外の場所で住職になった物が24%、成績が優秀でさらに勉学に励み、33年間の修学の後、檀林の住職になった者が１%であった。

江戸時代に入り、檀林が関東の十八檀林に限定されたこと、その中で頻繁に住職と随身が他山･帰山を繰り返し交流したことで、どの檀林でも同じ教育課程が実現し、そこで学ぶ僧侶は統一された浄土宗の教義を吸収することになる。

全国から毎年150人の修学僧が増上寺に入寺してきたことで、全国規模の交流が図られ、さらに出身地以外の住職になることは出身地、増上寺、就任地の3ヵ所でのネットワークを形成することになり、想像以上に情報交換がなされていたことが想定される。今後はそうした人的ネットワークについて探求することが必要になってこよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計3件）
伊藤真昭「現存最古の「増上寺入寺帳」について」（『歴史文化研究』5、査読なし、P1～P17、2016年3月）
伊藤真昭「「近江国甲賀郡内の知恩院門中について」（『歴史文化研究』6、査読なし、P1～P23、2017年3月）
伊藤真昭「知恩院の代替わり」（『佛教文化研究』60、査読あり、P83～P93、2017年3月）
〔学会発表〕（計1件）
伊藤真昭「近世近江知恩院直末寺院の相続について」（浄土宗総合学術大会、2017年9月13日）
〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
研究代表者
伊藤 真昭（ITO　Shinsho）
華頂短期大学　歴史学科　教授
研究者番号：30632898